

学問の進歩であるがこのままでは次第に家政学の領域から遠ざかって行くのではあるまいか。おのおのの学問はその領域をもつもので、物の研究も家政学においては人間および生活との関連性の追究が焦点となるべきではないと思う。

D— 6 家政学における“もの”の研究について

静岡女子短大 柳原 文一

1. 研究の目的 私は家政学を一個の独立した学問たらしめるよう努力している。現在主としてその研究方法について研究しているが、今回は家政学における“もの”の研究のありかたについて研究した結果を報告する。

2. 方法 これは家政学原論の一部をなすものである。従って、思索によって仮説を提出するものである。

3. 成果 現在の家政学関係の研究の大部分は物の自然科学的研究である。家政学は家庭生活殊にその維持向上について研究するものであると思う。家政学をほとんど家族関係に限るように説く学者もあるが、生活には必ず物が必要であって物なしには生活できないので、物の研究も家政学に大きな位置を占めるのは当然と思う。しかし家政学における物の研究は物それ自身の（殊に自然科学的な）研究だけではなく、生活（殊に消費生活）に必要な物・人間の欲する物・人間に使われる物としての研究でなければならない。即ち人間の生活（殊に家庭生活）に最も密接な形で研究されねばならない。科学による物の研究はその自己運動によって益々細分化され、生活から遠心的に離れて行く傾向をもっている。これは